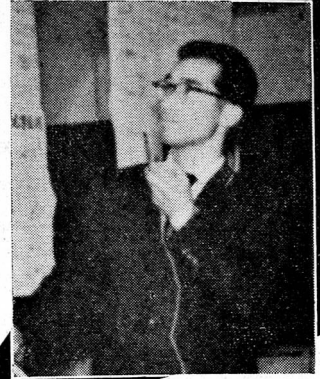


私の酪農経営について

旭川地方連盟・東神楽酪青研

松 永 収



この記録は、北日本酪農青年研究連盟の研究発表会の席上発表されたもので、同氏の経営の分析方法が非常に巧みであり、新しいものであった。テーマは主に労力の配分の仕方について取りあげ、年間総労働量を上手に配分することによって労働のピークを崩し、雇傭労力を零に近い状態にもつていった点は非常に立派であり、同氏の努力に深い敬意を表すると共にその概要をここに御紹介いたします。

(編集部)

一 はじめに

ただいまから申し上げます私の研究発表について、まず結論から申し上げますと、近年、米の生産量は飛躍的に増産されておりますが、それに反比例して、国民の生活上あいまつて米の消費量がしだいに減少していく傾向にあります。こうして食糧制度の改訂、あるいは米の統制撤廃等の事態が目前にせまっているのを感じるとき、集約農業としての水田酪農の必要性が、現在のわれわれに課せられた重大課題であり、それと平行して、われわれが常にモットーとしなければならぬ世界水準なみの生活文化の向上を図るためには、とくにこれらの諸問題の解決が急務ではなからうかと考えているのであります。

二 私の経営概況

はじめに私の経営の概況を申し上げます

第1表 経営概要

経営面積	家畜数	家族	労働力	家畜施設
水田 3ha	乳牛 4頭	祖父 1人	男 2	畜舎ブロック建 22坪 1棟
畑 3ha	育成牛 3頭	父 1人	女 1	サイロブロック建 9×24尺 1基
	馬 1頭	母 1人		堆肥場コンクリート造 11.25坪 1基
	鶏 15羽	本人 1人		尿溜コンクリート造 40石 1基
計 6ha		妻 1人 子供 3人	計 3人	

第2表 我が家の乳牛表

クインヘンドリカ ガヴァネスプレー	ガヴァネスプレーパークローキル 昭和31年5月17日生	昭和32年度 村内品評会1位
	ヘンドリカガヴァネスロメオ オームスビー 昭和32年11月20日生	昭和35年度 村内品評会1位 昭和35年度 上川品評会2位
昭和27年度 生	ヘンドリカガヴァネスヒム ベルパーク 昭和34年11月10日生	昭和35年度 村、上川品評会1位 全国共進会 36年度出陳候補牛
	ヘンドリカガヴァネスローベル 昭和35年10月20日生	
アイデアル ヤナギ 昭和31年12月25日生	昭和32, 33年度村内品評会1位 昭和33年度上川共進会2位 昭和33年度全道共進会2位	
レデーアールチェサンデー 昭和27年5月16日生	昭和32年度村内品評会1位 昭和32年度上川共進会2位 昭和32年度全道共進会4位	

と、第一表のとおりでありまして、位置は北海道の中央にある旭川市の東方一六キロに、東西に約一〇〇㍍の高台地に挟まれた幅三〇〇㍍ほどの沢地で、定期バス、さらには集乳路線も家の横を通るといって、立地条件としては比較的恵まれた位置にありす。

さて、乳牛を導入した動機を申し上げますと、多年にわたり掠奪農業を継続していた結果、米の収量を例にとつて申し上げますと、豊作の年で一〇㍍当たり六俵くらいでした。そこで私は単に乳牛を地力増進を図る目的から導入したのです。そして、経営を行なつていくうちに、自分の経営の中から、つぎの三点が最も大切な課題である

三 三つの問題点

ことを思い出し、その解決に力をいれてきたのであります。

その第一として、私の経営は第一表で示したように水田三畝、畑三畝という限られた経営面積であるから、優良牛を飼育しなければならぬということ。

その第二として、したがつて乳牛飼育においては最も経済性の高い牧草を多収穫するということ。

次に第三として、自家労力の適正な配分を行なうこと。

以上三点を目標にして、経営を進めてまいったのであります。この点について改善

第3表 昭和35年度飼料作物栽培計画表

区画	作物名	反別 (a)	施肥 10a当り (kg)	収量 10a当り (kg)	総収量 (kg)	利用成牛換算55頭		
						1番刈	2番刈	3番刈
1	家畜ビート	20	堆肥 6,000 尿 1,900 N 11.2 P 15 K 11.2	11,000	22,000			
	野菜、その他	10	堆肥 4,000					
	燕 麦	20	堆肥 3,750 N 4 P 4.5 K 6	400	800			
2	燕 麦	30	堆肥 4,000 N 3.5 P 4 K 6	400		サイレージ 生 草 乾 草		
	牧 草	20	N 10 P 12 K 8	9,500	19,000			
3	牧 草	50	N 12 P 16 K 8 尿 950	10,025	52,125			
4	牧 草	50	N 14 P 14 K 8 尿 950	8,500	42,500			
5	牧 草	50	N 14 P 12 K 8 尿 950	8,800	44,000			
6	牧 草	50	N 16 P 12 K 8 尿 950	7,500	37,500			

実績を申しあげますと、まず優良牛の選定ということ、セシス系の純粋牛を一頭導入し、第二表の「わが家の乳牛」が示すような実績があがっておりますが、まだ改良に努めております。

四 飼料作物の栽培計画
つきに第二番目の牧草については、飼料

第4表のイ 年間飼料給与計画表

月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	必要量合計
飼料													kg
牧草サイレージ	212日×25kg×5.5頭 →												(A) 29,425
乾牧草	212日×7kg×5.5頭 → 153日×4kg×5.5頭 ←												(B) 11,605
家畜ビート	212日×18kg×5.5頭 →												(D) 21,186
生牧草	← 153日×50kg×5.5頭 →												(C) 42,075

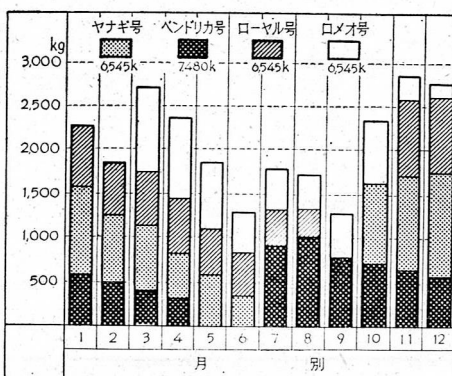
の栄養成分表よりヒントを得て、もつとも経済的である牧草を主体とした飼料作物栽培計画を樹て(第三表)、第四表のような給与を行なっております。

五 労働の問題
つきに第三の労働の問題であります、私の家の稼働力は三人で、一人一日一〇時

第4表のロ

飼料別	必要量 (kg)	反収 (kg)	必要面積 (a)
〈牧草〉			
サイレージ	35,310 (29,435)	10,000	40(A)
乾草	11,605	1,000	120(B)
生草	42,075	8,000	60(C)
家畜ビート	21,186	11,000	20(D)
計			240

第5表 昭和35年度牛乳生産実績表



間働くとして、一カ月の稼働時間は九〇時間となりますが、実際に働く時間を八〇%とすると七四四時間の自家労働資源があることとなります。

そこで第六表の労働時間表および第七表の年間労働表について検討すると、例えば五月では水稲に九九〇時間、乳牛に一五〇時間、その他各作物は労働力が要求され、したがってこの月は四一六時間、すなわち四一人の人手が不足ということとなります。そのようなことで、今年こそ労働力の配分の合理化を努めました、が、初年度のこのとて容易に改善することができません。しかし第九表「労働時間の変遷」のように、昭和四年には合

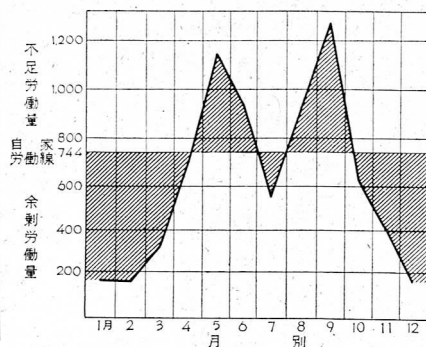
第6表 昭和35年度労働時間表

労働内訳	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
家族労働	744	696	744	720	744	720	744	744	720	744	720	744
雇傭労働	—	—	—	—	416	190	—	182	542	—	—	—
水 稻 300a	—	—	129	279	990	270	245	220	942	352	250	—
牧 草 220a	—	—	—	110	—	440	—	330	150	40	—	—
燕 麦 50a	—	—	—	83	—	—	—	156	—	—	—	—
家畜ビート 20a	—	—	—	53	—	30	52	—	—	—	35	—
その他 10a	—	—	—	20	20	20	20	20	20	—	—	—
飼養管理	180	180	180	150	150	150	200	200	150	180	180	180
計	180	180	309	695	1,160	910	517	926	1,262	607	430	180

第7表のイ 年間労働表

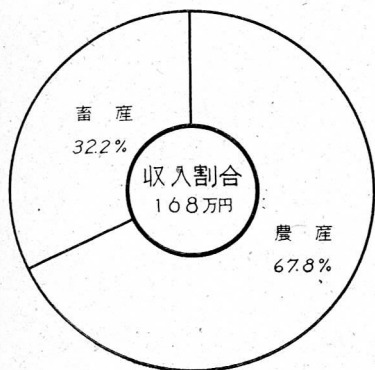
項目	労働時間計	10a 当たり時間	10a 当たり収	総金額	1時間当たり労働収入
水稲	3,677	122.5	9俵	108	266
牧草	1,070	48.6	8,000 kg	—	—
燕麥	239	47.0	10俵	6	251
家畜ビート	170	85.0	11,000 kg	—	—
その他	120	—	—	—	—
飼養管理	2,080	—	—	54	259
計	7,356	—	—	168	228

第7表のロ

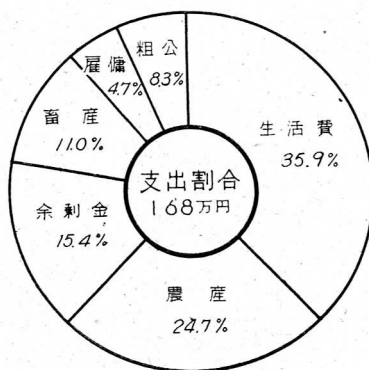


第8表 昭和35年度

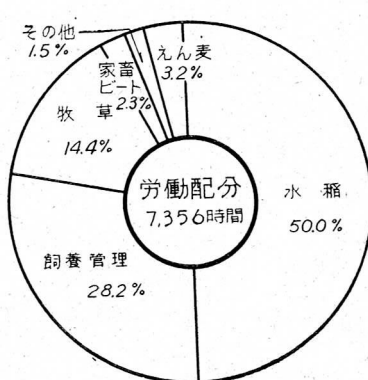
収入割合



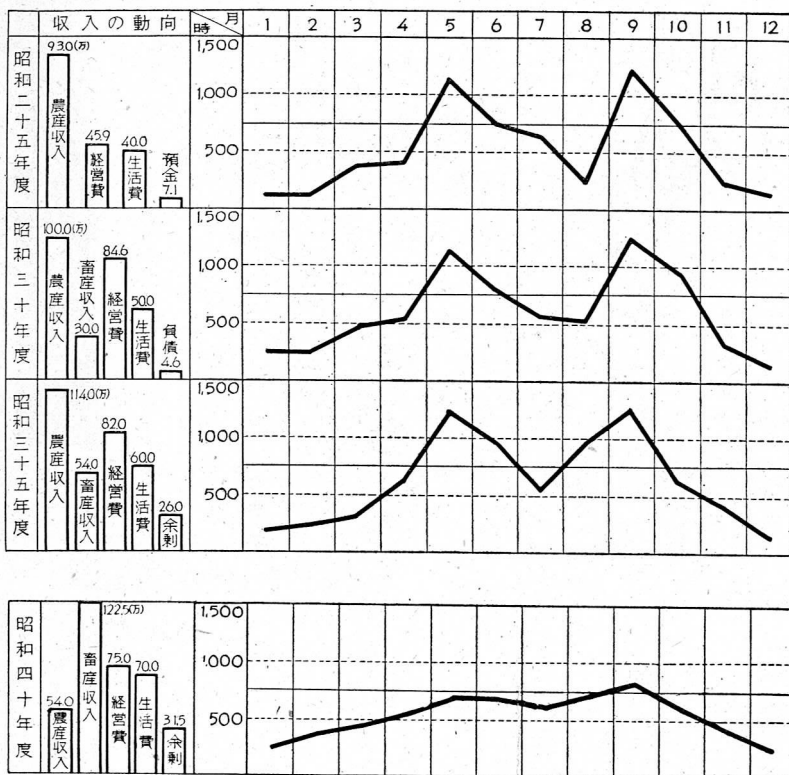
支出割合



労働配分



第10表 収支の動向



第9表 労働時間の変遷

理的な形態にしたいと思っております。つぎに、一時間当たりの労働報酬をみますと、水稲では一〇八万円の粗収入に對して、三六七七時間の労働力がかかり、一時間当たり二六六円の労働報酬となつており、また乳牛の方では五四万円の粗収入、二〇八〇時間の労働時間を要し、一時間当たり二五九円の報酬となつております。全体的にみて、年間八、七八四時間の自家労働力に

あるのに対し、三五年度における労働時間は七、三五六時間となつており、また一、四二八時間も自家労働力が余つてゐるにもかかわらず、一、三三〇時間の外部労働力を導入していることは、今年度の経営における労働の配分が適切でないことを示してあり、大いに反省し改善していかなくてはならないと思ひます。また「年間労働表」に示してある畜産の

一時間当たりの報酬が二五九円と、水稲よりも低くなつておりますが、これについては一月、二月、三月のような冬期間のひまな時期を活用しているということで、今後の経営に活かしてくる問題であると思ひます。

六 むすびに

つぎに第八表の昭和三五年度の収支をみますと、総収入一六八万円に対し、その六七・八％が農産収入で、三二・二％が畜産収入となつております。

この収入割り合いを労働配分からみると、四五％が五四万円の畜産収入の労働時間であります。また支出面では、良質な粗飼料給与の結果、畜産支出が一％に終つています。

最後に私は現在の経営を反省して、できれば第九表のような八時間労働で、第一〇表のような収入をあげ、われわれが理想としている生活文化の向上のために努力しなければならぬと思ひます。



(終)

附 表 經 営 の 推 移

	概 要	主 な 反 収	施 設、農 機 具
昭 和 25 年 度	水田3ha、畑3ha、馬1頭、緬羊2頭、 鶏15羽、労力3人、雇人1人	米6俵、燕麦6俵、馬鈴薯25俵、デント コーン2,500kg、大豆2俵	モーター、脱穀機、粉攪機
昭 和 30 年 度	水田3ha、畑3ha、乳牛3頭、馬1頭、 緬羊2頭、鶏15羽、労力3人	米8俵、燕麦8俵、デントコーン4,200kg 牧草4,000kg、家畜ビート4,500kg、馬 鈴薯35俵	上 同 水道、保道車、カッター、サイロ、畜舎 尿溜、堆肥場、ウオターカップ
昭 和 35 年 度	水田3ha、畑3ha、乳牛4頭、育成牛3頭 馬1頭、鶏15羽、労力3人	米9俵、燕麦10俵、牧草8,000kg、家畜 ビート11,000kg、馬鈴薯45俵	上 同 動力撒粉機、自脱、グライダー、電気バ リカン、レーキ、テンダー、共同購入
昭 和 40 年 度	水田1.5ha、畑4.5ha、成牛8頭、育成 牛4頭、馬1頭、鶏20羽、労力2.5人	米9俵、牧草10,000kg 家畜ビート12,000kg	上 同 小型四輪車、ミルカー

ラデノクロバー害虫の防除法

ラデノクロバーの害虫として被害の大きなものは「ウリハムシモドキ」「なめくじ」が挙げられますが、この防除には先ず禾本科との混播を行ない、通風、透射をよくし、湿気を好むこれら害虫の棲息環境をつくらないことや、肥培管理をよくして頻繁に利用し、乾燥通風をはかることなどが第一義であります。発生をみた場合の防除法を述べますが、「なめくじ」中、ラデノクロバーに有害する主なものは関東以南ではノハラナメクジ、東北地方ではオカモノアラガイで、暖地ではコウラナメクジとされてはいますが、薬剤としては一応砒酸石灰、DDT、BHC、ナメック、ナメコロン等が対称に考えられますが、頻繁に放撃牧するラデノクロバーに乳牛への影響も考へなければならぬから消石灰の散布をおすすめいたします。



ウリハムシモドキ

オカモノアラガイ

ノハラナメクジ

約六粒
雌雄
七粒、五粒
約二粒
体長1.2粒

一個二粒
殻 二五×一四×一〇粒
体長約三粒

オカモノアラガイに対する防除試験 (関東東山農試)

薬品と10%当り使用量	1平方 当り虫数	死体数	死 体 合 計	生存数	他へ逃 げられた もの	処 理
硫安 (6キロを5倍の水にうすめる)	67	40	65.7%	0	23	ラデノクロバー刈取後に散布
ナメック (20%)	99	20	20.2%	14	65	〃
砒酸石灰 (5.7キロ水250倍)	96	33	34.4%	24	39	〃 (展着剤加用)
BHC 粉剤 (3%)	148	7	4.7%	94	47	〃
消石灰 (40%)	120	91	75.8%	0	29	〃
消石灰 (80%)	226	225	99.6%	0	1	〃

を二(三回反覆散布(散布器使用がよい)を行ないますと完全に近い効果が挙げられます。すなわち殺のあるオカモノアラガイに効果のあつた消石灰は体全体を裸出しているナメクジにも当然効果が期待でき、しかも消石灰は肥料としても年々相当施用すべきものですから、害虫駆除と施肥を兼ねて発生のかんに拘らず二(三回の散布を行なうべきです。また寒冷地に多い「ウリハムシモドキ」の幼虫には除虫菊石けん液が効果的ですが、消石灰とBHC粉剤1体1(一・五%を三%程度混和したものを散布するの)も効果的です。